

## ロドスのアポロニオス (5)

### 模倣とホメーロス研究 1

高橋通男

ヘレニズムの詩の大きな特徴の一つは古典期ギリシア文学の模倣と再構成にある。しかし、模倣とは言っても単純な模倣ではなく、古典文学の諸要素(語彙、フレーズ、テーマ、等々)の新しいヴァリエーションを作り出し、再生させることである。この作業の中で複雑且つ巧みなテクニックを駆使して詩人たちは自己のオリジナリティーを競ったのである。一見するとヘレニズムの詩には至る処に古典文学の模造品がある。しかし、これはパロディーではない。ヘレニズムの詩人たちの殆んどは学問研究を本業としていたのである。それ故に彼らの詩作品は学問的性格を強く持っている。ヴァリエーションという模倣手段は彼らの研究成果を詩作品の中に植え込むにあたっての非常に有効な手段となったのである。この学問的性格こそヘレニズムの詩の本質であると言っても過言ではない。就中、カリマコスやリアーノスを筆頭とするアレクサンドリア期の詩人たちの作品は彼らの研究活動と切り離しては理解できないのである。

前3～2世紀のアレクサンドリアにおける文献学的研究活動はギリシア古典期のあらゆる文献に及んだ。その中でもホメーロスの叙事詩の研究と定本作りに注がれたエネルギーには想像を絶するものがあつた。この時代の研究成果に関しては、直接の資料が伝わっていない。これに関する我々の知識は、中世諸写本の余白に書き記されたスコリア、つまり学者たちのメモを通して得られたものである。いわば二次的資料である。しかしながら、このスコリア(古註)はアレクサンドリア期の学者たちの研究についての重要な情報を提供してくれる。実のところ、近代における古典文献学の方法はスコリアを通して知られる古代の文学研究の方法を継承しているのである。ムーセイオンにおける文学研究の成果が直接資料として伝わらなかったと同様に、この時代の詩作品の保存伝承も極めて悪い。そのような中であつて、アポロニオスの叙事詩「アルゴナウティカ」4巻はほぼ完全な形で残っている。この叙事詩は伝存するヘレニズムの詩作品の中でも特に徹底したHomericである。語彙、フレーズ、テーマ、等々、殆んど全ての材料をホメーロスより借りているのである。それにも拘わらずホメーロスの叙事詩とは似ても似つかない叙事詩体の作品に仕上がっている。これはヘレニズムの文学テクニックの成果と言えるだろう。この詩の主題は、50名余りの英雄たち(アルゴナウタイ)の冒険物語である。しかし、これは表の顔で

あって、五千行以上の詩行の中にホメーロス研究の様々な難問が隠されているのである。

ヘレニズムの詩人たちは *imitatio cum variatione* というテクニックを *allusion* の手段に使った。この *allusion* が目指すところは、多くの場合、ホメーロスの難語の解釈、文法上の諸問題、とりわけテキストの読みに関する諸論、等々である。ヘレニズムの詩は多かれ少なかれ本質的には学問的性格をもっている。しかし、この性格の全容は未だ殆んど解明されるに至ってはいないのである。G. Giangrande はこの点を強調して多くの材料を提供してきたが<sup>1)</sup>、それは尚、氷山の一角にすぎない。この問題についてヘレニズムの詩の註釈者たちは殆んど目を向けてこなかった。そのためテキスト校訂作業において多くの誤りを犯していると思われる。なるほどアレクサンドリア期の文献学の第一資料が伝わっていないこと、また当時アレクサンドリア図書館に集められた諸写本も伝わっていないことが、当時の学者たちの研究内容を正確に知ることを阻んでいるのは事実である。しかし、現代の研究者を悩ませている諸難問は古代の研究者をも悩ませていたことを古注は我々に伝えてくれる<sup>2)</sup>。そして何よりも我々の研究対象としている詩作品そのものが正に第一資料と言えるのである。

本稿の目的は、アポロニオスが叙事詩「アルゴナウティカ」の中で *allusion* を通して語るホメーロス研究上の諸問題を解き明かすことにある。就中、ホメーロスのテキストの読みの問題は興味深い。今日、古典のテキストに附せられている *apparatus criticus* は異読 (*variae lectiones*) の墓場と化したかの感がある。しかし、アポロニオスの叙事詩においては、ホメーロスの *variae lectiones* は最も興味をそそるテーマである。アポロニオス自身、当時第一級のホメーロス学者であった。校訂作業にあたって各種の膨大な量のホメーロス写本を目の前にしていたはずである。ホメーロスのテキストをどう読むか、正に *variae lectiones* は生きていたのである。しかし、それらの諸写本は煙滅してしまった。今日にかろうじて生き延びた *variae lectiones* も殆んどの場合、どの時代のものか知ることは困難である。従って、時には推定が飛躍の誹をまぬかれ得ない場合もある。しかし、いずれにせよヴァリエーションが暗示するものが何であるかを一つ一つ解き明かすことによって、ヘレニズムの詩の本質的部分も少しずつ明らかになってくるものと思われる。

A. R. 1. 1232-3

*τῆς δὲ φρένας ἐπτοίησε*

*Κίπρις, ἀμηχανίῃ δὲ μόγις συναγείρατο θυμόν.*

「キュプリスは彼女（ニンフ）の心を放心状態にしてしまった。彼女はほとんど心を抑えることができなかった。」

1232行の動詞 *πτοίειν* の本来の意味は「恐がらせる、びっくりさせる」である。ここでは暗喩的に使われている。*φρήν* は横隔膜を指す。感情が宿る場所ということになってい

る。ホメーロスには *πτοιεῖν* の用例一つしかない。

χ 297-8

δὴ πότε 'Αθηναίη φθισίμβροτον αἰγίδ' ἀνέσχευ  
ἰψόθεν ἐξ ὀροφῆς· τῶν δὲ φρένες ἐπτοίηθεν.

「まさにその時、女神アテーナイエーが人間の命を奪う楯アイギスを屋根の上から高々とかかげると、彼らの心は恐怖に把えられた」。

298行の *τῶν δὲ φρένες ἐπτοίηθεν* をアポロニオスは *τῆς δὲ φρένας ἐπτοίησε* という表現によって模倣しているのである。この模倣の仕方はヘレニズムの詩の特長をよく示している。ホメーロスの受動形は能動形に、当然のことだが、主語 *φρένες* は目的語 *φρένας* に、男性・複数形の *τῶν* は女性・単数形に移し変えられている。更に、戦いの女神アテーナーは恋愛を職分とする女神キュプリス（つまりアプロディーテー）に変わり、場面も戦いから恋へと移されている。oppositio in imitando という手法の典型である。勿論、アポロニオスの *φρένας ἐπτοίησε* という表現はホメーロスにとっても奇異なものではない。例えば、類似の動詞 *τρομεῖν* の用例として、*τρομέοντο δὲ οἱ φρένες* (K10) と並んで *τρομέουσι δὲ τε φρένα* (O627) という表現がある。*πτοιεῖν* に関して言えば、ホメーロス以降の用例としてサッポアの次のような詩句が残っている。

Sapph. fr. 31. 6 (Lobel) Κραδίαν ἐν στήθεσσι ἐπτοίαισεν.

アポロニオスの *τῆς δὲ φρένας ἐπτοίησε* はどう見てもホメーロスの詩行を模倣したヴァリエーションと考えられよう。ところが、この詩行には余り単純に片附けることのできない事情がある。というのは、中世ビザンチンの註釈者エウスタティウスが χ297f. について次のような注釈を残しているからである<sup>(9)</sup>。

Eust. 1924, 40.

Καὶ φησί· δὴ πότε 'Αθηναίη φθισίμβροτον αἰγίδ' ἀνέσχευ ἰψόθεν ἐκ κορυφῆς,  
τῶν δὲ φρένας ἐπτοίησε, τουτέστιν ἐπτόησεν· ἢ καὶ ἄλλως, τῶν δὲ φρένες  
ἐπτοίηθεν, τουτέστιν εὐλαβήθησαν, ἐπτοήθησαν.

ここに記されているホメーロスの詩行の前半部は伝存の全ての中世写本と大いに異なる。χ298行は *ἰψόθεν ἐξ κορυφῆς· τῶν δὲ φρένες ἐπτοίηθεν* ではなく、*ἰψόθεν ἐκ κορυφῆς, τῶν δὲ φρένας ἐπτοίησε* となっている。そして、後半において *τῶν δὲ φρένες ἐπτοίηθεν* という読み方が紹介されている。我々がここで注目するのは *τῶν δὲ φρένας ἐπτοίησε* である。これは何を意味するのか。ホメーロスの全ての伝存写本が伝える *φρένες ἐπτοίηθεν* という読み方以外に、エウスタティウスは、*φρένας ἐπτοίησε* という読み方を、或いはこの読みを含む我々には伝わっていない系統の写本を知っていたと考えてよい。それとも、写本の伝承過程のどこかで *φρένες ἐπτοίηθεν* を *φρένας ἐπτοίησε* と誤写したのであろうか。ところで次に、エウスタティウスが残したこの *φρένας ἐπτοίησε*

はアポロニオスの当該の詩句と同一であることは何を意味するのか。アポロニオスはこの読み方を知っていたと推測することは不可能ではない。*φρένας ἐπτοίησε* という読みがエウスタティウスからどのくらい遡り得るのかは知り得ない。しかし、もしアポロニオスが参照した古代の写本の中に *φρένας ἐπτοίησε* という読みを含む写本があったとすれば、二つの読み方のどちらが真正であるかについて議論があったはずである。アポロニオスはこの二詩行を作るにあたって場面設定も含めてホメーロスの二詩行を模倣している。その場面に *φρένας ἐπτοίησε* という句を入れたと考えられる。或いはむしろ、この読みを使うことが本来の目的であったと考えるほうがよい。逆転された場面設定はホメーロスの二詩行への allusion となっているからである。ホメーロスの二詩行を考えると、*φρένες ἐπτοίηθεν* よりも *φρένας ἐπτοίησε* と読むほうが文章は滑らかである。「アテーナーはアイギスを高くかかげて、男たちの心を恐怖に陥し入れた」となる。*ἐπτοίηθεν* を読むと主語が入れ替り、対比的になるが、対比を際立たせる小辞が少し弱い。そのために近代の校訂者は *ὄροφῆς* の次にコロンを打つのである。アポロニオスはホメーロスの二つの読み方のうち *φρένας ἐπτοίησε* を支持した。これがこの詩行の目的かも知れない。ついでに付け加えると、アポロニオスの断片に類似の詩行が一つ残っている。

A.R. Fr. (Λέσβου Κτίσις) 12.6 (Powell)

ἡ γὰρ ἐπ' Αἰακίδῃ κούρης φρένας ἐπτοίησεν

A.R. 2. 406-7

οὐδέ οἱ ἦμαρ

οὐ κνέφας ἥδυμος ἕπνος ἀναιδέα δάμναται ὄσσε.

407行の *ἥδυμος ἕπνος* 「甘美な眠り」の *ἥδυμος* はアポロニオスがここで一回しか使わない言葉である。*ἥδύς* の派生語の一つで稀語に属する。ホメーロス以降の詩人に幾つかの用例がある。Simonides 599 (Page), *οὗτος δέ τοι ἥδυμον ἕπνον ἔχων* : Alkman 135 (Page) *Γαδυμέστατον*: h. Hom. Merc. 241 *φή ρα νεόλλουτος προκαλείμενος ἥδυμον ἕπνον*: ibid. 449 *εἰχροσύνην καὶ ἔρωτα καὶ ἥδυμον ἕπνον ἐλέσθαι* : Antimachos 94 *ἐπεὶ ρά οἱ ἥδυμος ἐλθών* (Wyss).

用例は少ない。ところで、*ἥδυμος ἕπνος* からすぐに連想されるホメーロスの定型句は *νήδυμος ἕπνος* である。意味は *ἥδυμος ἕπνος* と同じである。アポロニオスは *νήδυμος* という言葉を一度も使用しない。アポロニオスの *ἥδυμος ἕπνος* はホメーロスの *νήδυμος ἕπνος* のヴァリエーションということになろう。

この *νήδυμος* は純然たるホメーロス語である。ホメーロスの用例は14ある (B2, K91, 187, Ξ242, 253, 354, Π454, Ψ454, δ793, μ311, 366, ν79, h. Ven. 171, h. Hom. 19.16)。最後の一例以外は全て *νήδυμος ἕπνος* という定型句で使用される。ところで、アポロニ

オスが *νήδυμος* の代りに *ήδυμος* を使用した意図は何か。実はホメーロスの中世写本の中で *ήδυμος* は *νήδυμος* の異読として二度現われる (δ793, μ311)。この異読 *ήδυμος* が *νήδυμος* の誤写なのか、それとも *νήδυμος* の意味解釈として書き込まれた gloss であったのか、それとも古代に遡る読み方であったのか、判然とはしない。しかし、「イーリアス」第2歌第2行に付せられているスコリアは興味を引く。(4)

B2 εἶδον παννύχιοι, Δία δ' οὐκ ἔχε νήδυμος ὕπνος

Schol. ad B2b νήδυμος: ὅτι τὸ νήδυμος μετὰ τοῦ ν̄, καὶ οὐχὶ “ήδυμος” (ὡς ἔνιοι) παρὰ τὸ ἡδύς, ὡς δῆλον ἐκ τοῦ “νήδυμος ἀμφιχυθείς” (Ξ252). οἱ δὲ μεθ' Ὀμηρον καὶ χωρὶς τοῦ ν̄ λέγουσι ἴσως οἶν ἐνόμισαν ἀπὸ τοῦ ἡδύς εἶναι παράγωγον τὸ ἡδυμος, ὡς ἔτυμος ἐτήτυμος. ὁ δὲ ποιητῆς ἐπὶ τοῦ ἀνεκδύτου τίθησι τὴν λέξιν.

Shol. B2C' νήδυμος: Ἀρίσταρχός φησιν ἐκ τοῦ δύνω δύμος καὶ ἐν ἐπεκτάσει νήδυμος· οὐ γὰρ παρὰ τὸ ἡδύς· λέξει γὰρ δασυνομένη οὐ συντίθησι τὸ ν̄η. οἱ δέ, ὄν οὐ δυνατὸν ἀποδύσασθαι, ἢ ὁ βαθύς ἢ ὁ ἀνώδυνος.

このスコリアによると、アリスタルコスは *ν* を一緒に読んで *νήδυμος* と読むべきであって *ήδυμος* ではないと考えた。ということは、つまり *νήδυμος* と並んで *ήδυμος* という読み方が既にアレクサンドリア期にはあった、或いは、*ήδυμος* と読むべきであるという考え方があったと考えてよい。*ήδυμος* は古代に遡る *νήδυμος* の異読なのである。そうすると、アポロニオスの *ήδυμος ὕπνος* はホメーロスの *νήδυμος ὕπνος* のヴァリエーションとは言えなくなる。アポロニオスはホメーロスの読み方として *νήδυμος* ではなく *ήδυμος* を考えていた可能性がある。もしそうならば、何故これを使ったのか。*ήδυμος* を真正の読み方と考えたのか。*νήδυμος* の意味解釈に何か問題があるのか。実は、*νήδυμος* に関しては語源、意味の両方の点で今日に至るまで明確な結論に達するに至っていない。

近年の研究では、Buttmann が指摘したように<sup>(5)</sup>、*νήδυμος* は *ήδυμος* の語頭に *ν* が付加されて生じたと説明されている。ホメーロスの12例中7例において *ν* は先行語の末尾音になっている (B2, K91, 187, Ξ242, 354, δ793, μ311)。アリスタルコスが *νήδυμος* と読んだのは hiatus を避けるためであったという考え方もある (Π454, μ366, ν79)。つまり、彼は *ήδυμος* の語頭に本来はディガンマ (*F*) が存在したこと、つまり、*ήδυμος* は \**Fήδυμος* であったことを知らなかったためである。しかし、このような考え方では解決できない用例はどう説明すればよいのか。例えば、Ξ253の例では *νήδυμος* は詩行の先頭に現われる。しかも前詩行の末尾の言葉は *αἰγλόχοιο* である。ここでは先行語の末尾音に *ν* は無い。従って説明できないのである。

最近の考え方によると、*νήδυμος* は人工的な形である、そして本来の形は *ήδυμος* であり、hiatus を避けるために導入された先行語の末尾の *ν* が誤って後続語に付着して発展し

たもの、つまり *ν ἐφελκυστικόν* の結果の産物ということで落着している。<sup>(6)</sup>この点については既に Bechtel は次のように明確にテキストを読むべきであると主張した。<sup>(7)</sup>

B2 Δία δ' οἶκ' ἔχεν ἥδυμος ἕπνος  
 Ξ242 προσεφώνεεν ἥδυμος ἕπνος  
 δ793, μ311 ἐπήλυθεν ἥδυμος ἕπνος  
 K91f. ἐπ' ὄμμασιν ἥδυμος ἕπνος/ἰξάνει.

最近のホメーロスの註釈家たちは以上のような見解に従って *νήδυμος* は *ἥδυμος* の誤りであると明記している。<sup>(8)</sup>ところで、*νήδυμος* という語形が現われたのはどの時代まで遡ることができるのか。ホメーロス自身の時代より以前かも知れない。というのは、

ν79-80 καὶ τῷ νήδυμος ἕπνος ἐπὶ βλεφάροισιν ἔπιπτε,  
 νήγρετος ἥδιστος,

という詩行の中で、*ἥδιστος* という言葉は *νήδυμος* を解釈しているようにも見えるからである。単なる tautology と考えることもできるが、あるいは既に意味不明となっていたのかも知れない。上に引用したスコリアにはアリストアルコスの語源的解釈が記録されている。それによると、*νήδυμος* は \**νη-* と *δύω* より作られた言葉で、*ἀνέκδυτος* 「避け難い」の意味であるとアリストアルコスは考えた。これは可能である。そうであるなら、*ν80* の *ἥδιστος* は tautology ではないということになる。

さて、アポロニオスの *ἥδυμος ἕπνος* は *νήδυμος ἕπνος* と対立する読み方であったと考えてよいのではないか。ホメーロスにおける *νήδυμος ἕπνος* の詩行中の位置は12例中の2例だけがカエストラの直前に置かれる。アポロニオスは意識してこの少数例の位置に *ἥδυμος ἕπνος* を置いている。また、*κνέφας ἥδυμος ἕπνος* と書くことによって hiatus を避けている点にも注意すべきである。アポロニオスはこの詩行によって *νήδυμος* を *ἥδυμος* と読むべきであることを暗示していると考えられることも可能である。

#### A.R.3.183-4

φρασσόμεθ' εἴ τ' ἄρηι συνοισόμεθ' εἴ τέ τις ἄλλη  
 μῆτις ἐπίρροθος ἔσται ἐεργομένοισιν ἀντῆς.

「戦いを交えるか、それとも戦いを控える場合に何か他の助けになる策があるか考えよう」

184行の *ἐεργομένοισιν ἀντῆς* はホメーロスの *ἐεργομένοι πολέμοιο* (N525) のヴァリエーションである。詩行中の位置も同じになっている。*ἀντή* は厳密には「戦いの叫び」という意味である。*πόλεμος* の代りに *ἀντή* を使うのは、ホメーロスの定型句 *ἀντή τε πόλεμός τε* (A492, Ξ37, 96, Π63) に基づく。*ἀντή* によって *πόλεμος* を連想させるためである。

## N523-5

ἀλλ' ὁ γ' ἄρ' ἄκρω Ὀλύμπῳ ἰπὸ χρυσεόισι νέφεσσιν  
ἦστο, Διὸς βουλῆσιν ἐελμένος, ἔνθα περ ἄλλοι  
ἀθάνατοι θεοὶ ἦσαν ἐεργόμενοι πολέμοιο.

「だが（アレースは）オリュムポスの頂上で、黄金色の雲の下に、ゼウスの謀りごとに妨げられて、座っていた。また他の不死なる神々も戦いを差しめられてその場所に居た」

ἐέργειν は εἶργω の叙事詩形である。この動詞の意味は二通りある。一つは、「閉じ込める」、もう一つは、「締め出す、遠ざける」である。エウスタティウスはこの対照的に異なる意味の由来を、前者は εἶργειν、後者は εἴργειν であったが、これら異なる動詞が形態上混同されるに至った結果である、と考えている。<sup>(9)</sup>

さて、アポロニオスの ἐεργομένοισιν ἀντῆς は「戦いの叫びから遠ざけられる」つまり「戦いの叫びを控える」という意味になり、ホメーロスの ἐεργόμενοι πολέμοιο の単なる模倣のように見える。しかし、スコリアに残された僅かな記述は古代において ἐεργομένοι πολέμοιο の構文上の解釈をめぐる議論があったことを推測させる。スコリアは次のようになっている。

Schol. N523b. ἰπὸ χρυσεόισι νέφεσσιν {ἐεργόμενοι}

この記述に従うと、アレースを始めとする神々は「金色の雲によって閉じこめられている」ことになる。これでは πολέμοιο の文法上の機能が明確ではない。従って、「金色の雲によって神々は戦いから遠ざけられていた」と解することもできる。スコリアが ἰπὸ χρυσεόισι を ἐεργόμενοι と結びつけて解釈しようとする理由は判然としないのであるが、これについては近代の註釈家の意見が一つの示唆を与える。リーフ<sup>(10)</sup>は、神々が金色の雲でできた天蓋の下に座するという考えはホメーロスには他に類例がない、つまり non-Homeric であるとするとする。

もし古代の学者が「金色の雲の下に神々が座っていた」と解釈することに難色を示したとすれば、ἰπὸ χρυσεόισι νέφεσσιν と ἐεργόμενοι を結びつけて考える理由の一つになろう。しかしこの場合、別の疑問が浮上してくる。つまり、オリュムポスの神々が金色の雲によって閉じ込められていること自体が不可解なのである。というのは、「イーリアス」第8歌において、ゼウスが神々に命じたのは、単に人間たちの戦いに加わらないようにということだけであるからだ。神々を何らかの手段を用いて押え込んだわけではないのである。

アポロニオスの時代にホメーロスのこの箇所を解釈をめぐる議論があったとするなら、アポロニオスの ἐεργομένοισιν ἀντῆς というヴァリエーションはこの問題を念頭に置いて作られたと考えてよい。ἐεργομένοισιν ἀντῆς を独立に使用していることはホメーロスの ἐεργόμενοι πολέμοιο を ἰπὸ χρυσεόισι νέφεσσιν から切り離して読むべきであることへの allusion と言えよう。従って、リーフの問題提起もあるが、近代の一般的な解

釈と同じく、アポロニオスは *ὑπὸ χρυσοίοισιν νέφεσσιν* を「金色の雲の下に」と解釈したことになる。

A.R. 3. 185-6

*μηδ' αὐτῶς ἀλκῆ, πρὶν ἔπεσσί γε πειρηθῆναι*  
*τόνδ' ἀπαμείρωμεν σφέτερον κτέρας·*

「言葉で試す前にそのように力によって彼から持ち物を奪うことは止めよう」

この詩行の問題は185行の *ἔπεσσί γε πειρηθῆναι* である。*ἔπεσσί* については *ἐπέεσσι* という読み方もある (Ω及びパピルスの読み方)。これは魅力的であるが韻律上の問題から採用されない。さて、*ἔπεσσι γε πειρηθῆναι* という句はアポロニオスの唯一の用例である。そして、これとほぼ同一の句がホメーロスにも一回だけ現われる。

ω 249-40

*ὦδε δέ οἱ φρονέοντι δοάσσατο κέρδιον εἶναι,*  
*πρῶτον κερτομίους ἐπέεσσιν πειρηθῆναι.*

「最初に意地悪い言葉で試すこと、こうすることが思案した彼には得策と思われた」

この箇所(の)240行 *ἐπέεσσιν πειρηθῆναι* はアポロニオスの *ἔπεσσί γε πειρηθῆναι* と殆んど同じである。*ἐπέεσσι* が *ἔπεσσί γε* に入れ替っているだけである。アポロニオスの句はホメーロスのヴァリエーションである。異読 *ἐπέεσσι* を *ἔπεσσί γε* の代りに読むとホメーロスそのままということになる。この模倣によってアポロニオスは何を示そうとしているのであろうか。実は、ホメーロスの *ἐπέεσσιν πειρηθῆναι* に関してテキスト校訂作業上一つの議論がある。ホメーロスの中世写本は *ἐπέεσσι πειρηθῆναι* である。しかし、テキスト校訂者は *ἐπέεσσι* に *ν* を付加して *ἐπέεσσιν* とする。*ν ἐφελκυστικόν* である。というのは、*ἐπέεσσι* では韻律が合わないからである。しかし、*ν* を付加することには障害が一つある。つまり、*ἐπέεσσιν πειρηθῆναι* はいわゆる Wernicke の法則に反するのである。Wernicke の法則をいうのは、簡単に言うと、ホメーロスのヘクサミーターにおいては *Diaeresis* の前の第四脚がスポンデーである場合には、この第四脚の末尾の音節は「本質的に長い」音節でなければならない、というものである。<sup>(11)</sup> 「位置によって長い」音節であってはならない。ところが、*ἐπέεσσιν πειρηθῆναι* と書くとこの法則に反する。つまり、*ἐπέεσσιν* の末尾の音節は「位置によって長い」音節になってしまうのである。但し例外が一つだけある。*τ576 ἄελθον τοῦτον* が「オデュッセイア」におけるこの法則の唯一の例外である。これが、問題の *ἐπέεσσι* を敢えて *ἐπέεσσιν* と書く依り処となっている。ところで、この問題の有力な解決策がパピルス断片の中に発見された。後3～4世紀頃のものとして推定されるパピルスの写本断片で、P<sup>28</sup>即ち Rylands 53 と分類されているものである。この写本は、中世写本の *ἐπέεσσι πειρηθῆναι* の代りに *ἔπεσιν διαπειρηθῆναι* と読む。この読み方は中世写



本が抱える韻律上の困難を一挙に解決してくれるのである。次のようになる。

πρῶτον κερτομίοις ἔπειν διαπειρηθῆναι

中世写本の場合を示すと次のようになる。

πρῶτον κερτομίοις ἐπέεσσι πειρηθῆναι

但し、*διαπειράσθαι* という動詞はホメーロスには他に用例はない。更に、この動詞は散文語である。しかし不可能ではない。これを正解として支持する人は少なくない。Wilamowitz はこの読み方を Homeric であるとして支持する。P. von der Mühl はこれを真正の読み方として、その校訂本に採用している。W. S. Stanford もこれを支持する。<sup>(12)</sup>

さて、以上の点を念頭に置いてアポロニオスの *ἔπεσσι γε πειρηθῆναι* を考えてみると、これもホメーロスの問題の解決策の一つと考えることができる。アポロニオスの諸写本及びパピルスに現われるもう一つの読み方 *ἐπέεσσι* を読んで *ἐπέεσσι γε πειρηθῆναι* とすることは既に述べたように韻律上の理由から採用することはできない。仮に *γε* を取り除くと、*ἐπέεσσι πειρηθῆναι* となりホメーロスの問題の句と同一になってしまう。その上詩行全体の韻律も損われる。従って、アポロニオスの場合は *ἔπεσσι γε πειρηθῆναι* と読まざるを得ない。ホメーロスの中世写本の *ἐπέεσσι*、パピルスの *ἔπειν*、そしてアポロニオスの *ἔπεσσι* は全て *ἔπος* という名詞の複数与格形としてホメーロスの叙事詩の中では同等に使用されている。どの形を選択するかは詩人の選択にまかされている。要は韻律にどれが適合するかである。パピルスの読み方 *ἔπειν διαπειρηθῆναι* はホメーロスの真正の読み方かも知れない、或いは古代の学者が推定した読み方とも考えられる。或いは、中世諸写本の流れとは別系統の写本の読み方と考えることもできよう。そこで、アポロニオスの *ἔπεσσι γε πειρηθῆναι* が何を言おうとしているかであるが、推測するに、恐らくアポロニオスはホメーロスの問題の中世写本の読み *ἐπέεσσι πειρηθῆναι* に *γε* を挿入することを提案しているのではないだろうか。そうすると、*ἐπέεσσι γε πειρηθῆναι* となってヘクサミーターは完成する。韻律上の法則に何ら抵触することはない。アポロニオスの模倣のポイントは *γε πειρηθῆναι* にあると考えられるのである。尤も、写本テキストの韻律の不備を修復する手段として *γε* という小辞を挿入することは学者たちが古来より時々使う便利な方法であることも確かである。ホメーロスの真正の読み方が *ἐπέεσσι γε πειρηθῆναι* であった可能性もある。しかし、少なくともアポロニオスの詩行が暗示していることは、ホメーロスの問題の詩行に *γε* を挿入することを提言していると考えられることは可能である。

A.R. 3.784-5

τότε δ' ἂν κακὸν ἄμμι πέλοιτο  
κείνος, ὅτε ζωῆς ἀπαμείρεται.

「(ヤーソンが) 命を奪われる時、その時は、彼は私にとって禍いの種となるだろう」

これは王女メーデイアの言葉である。785行の *ἀπαμείρεται* は稀語に属すると言えよう。ヘシオドスに2例 (Th. 801, Op. 578), アラートスに1例 (Arat. 522) 使われるのみである。但しこれら3例についてはいづれも *ἀπομείρεται* という異読がある。アポロニオスの上記の詩行はホメロスとどのような関係があるのかというと、「オデュッセイア」第17歌に類似の詩行がある。

ρ322-3

ἦμισυ γάρ τ' ἀρετῆς ἀποαίννται εὐρύοπα Ζεὺς  
ἀνέρος, εἶπ' ἄν μιν κατὰ δούλιον ἡμαρ ἔλησιν.

「男の能力の半分を遠くまで轟くゼウスは奪ってしまうものだ、(ゼウスが) その男を奴隷の日々にとり込めてしまう時には」

これは豚飼エウマイオスの言葉である。アポロニオスはこの詩行中の322行の句 *ἀρετῆς ἀποαίννται* を *ξωῆς ἀπαμείρεται* と言い換えている。両句の詩行中の位置は全く同じである。*ἀποαίννται* の能動の意味と *ἀπαμείρεται* の受動の意味は対比をなし、これらの動詞はホメロスでは主文に、アポロニオスでは従属文に置かれてこれも倒置されている。ヘレニズム詩の特長を示すホメロスのヴァリエーションである。

さて、*ἀποαίννσθαι* (又は *ἀπαίννσθαι*) の用例はホメロスには他に6例ある (A582 N262 O595 P85 μ419 ξ309)。アポロニオスにはこの動詞の用例はない。*ἀποαίννσθαι* は「人(属格)から物(対格)を奪う」(対格のみの例もある)という構文をとる。これはアポロニオスの *ἀπαμείρειν* の構文とは対応していないことになる。785行の *ἀπαμείρεται* では奪われる対象は属格形をとっている。アポロニオスには *ἀπαμείρειν* のもう一つの用例があって、これは能動形で使用されるが、構文は二つの対格をとる (A.R. 3. 186)。

アポロニオスは *ξωῆς ἀπαμείρεται* という模倣によって何の allusion としているのであろうか。実は全くの偶然としか言いようがないのだが、アポロニオスが模倣の対象とした上記ホメロスの詩行をプラトンが対話篇「法律」の中に引用しているのである。それは次のようになっている。

Plat. Leg. 777a

ὁ δὲ σοφώτατος ἡμῖν τῶν ποιητῶν καὶ ἀπεφήνατο, ἰπὲρ τοῦ ἀγορεύων, ὡς—  
ἦμισυ γάρ τε νόου, φησὶν, ἀπαμείρεται εὐρύοπα Ζεὺς  
ἀνδρῶν, οὗς ἄν δὴ κατὰ δούλιον ἡμαρ ἔλησι.

プラトンが記憶を頼りにこの詩行を書いたのか、写本テキストを参照して書いたのかは知るよしもないが、ホメロスの中世写本が伝える詩句とプラトンの引用の間にはかなりの相違が見られる。*τ' ἀρετῆς ἀποαίννται* は *τε νόου ἀπαμείρεται* に、*ἀνέρος* は *ἀνδρῶν* に、*εἶπ' ἄν μιν* は *οὗς ἄν δὴ* に入れ替っている。ここで特に我々の注意を引くのは、ア

ポロニオスがホメロスのヴァリエーションとして使ったと思われる *ἀπαμείρεται* という動詞をプラトンは *ἀποαίννται* の代りにホメロスの言葉として記していることである。ホメロスのこの詩行は更にアテーナイオスも引用している。それは次のようになっている。

Athenaeus 6. 86. 264e

ὁ δὲ σοφώτατος τῶν ποιητῶν φησιν  
 ἡμῖσιν γάρ τε νόον ἀπαμείρεται εἰρύνοπα Ζεὺς  
 ἀνδρῶν, οὓς ἂν δὴ κατὰ δούλιον ἡμᾶρ ἔλῃσι.

アテーナイオスの引用はプラトンが引用している詩句と全く同じになっている。アテーナイオスは後200年頃活動した人であるから、プラトンよりずっと後の人である。アテーナイオスがプラトンと同じテキストを使ったのか、それともプラトンの引用をそのまま利用したのか。その辺りの事情は判然とはしない。ホメロスのこの詩行は更に時代を下って、中世の註釈家エウスタティウスが部分的にはあるが引用している。

Eust. 1766. 37

ἡμῖσιν γάρ τ' ἀρετῆς ἀπαμείρεται εἰρύνοπα Ζεὺς ἀνδρῶν, οὓς ἂν δὴ καὶ ἐξῆς, ὁ περ σημαίνει ὅτι παρά τισιν ἄλλοις εὐρηται κατ' ἑτεροίαν γραφήν, ἡμῖσιν γάρ τε νόον ἀπαμείρεται, ἦγον τὸ ἡμῖσιν τῆς φρονήσεως.

これによると、我々に伝わっている中世写本の読み方の中の *τ' ἀρετῆς ἀποαίννται* は *τ' ἀρετῆς ἀπαμείρεται* となっており、*ἀποαίννται* が *ἀπαμείρεται* に入れ替わっていて *ἀρετῆς* はそのままである。また、*ἀνδρῶν, οὓς ἂν δὴ* はプラトンの読み方に同じである。この注釈は更に付け加えて、他の諸写本には *ἡμῖσιν γάρ τε νοοῦ ἀπαμείρεται* という読み方も見られる、そして *νοοῦ* とは *φρονήσεως* のことであると述べている。他の諸写本に見い出される読み方はプラトン及びアテーナイオスの読み方と同一である。

以上の古代及び中世の三つの引用は何を意味するのか。これら三人の学者は、まず我々の中世写本の中の読み方 *ἀποαίννται* を全く知らないのである。*ἀρετῆς* についてはエウスタティウスのみが知っていたことになる。しかし、*ἀνέρος, εἶτ' ἂν μιν* という読み方も三人は知らなかったことになる。三人の引用がどれだけ正確なものであるのかは知ることはできない。また、三人が同一の或いは同系統の写本を見たという証拠もない。しかし、一つだけ確かなことは、*ἀποαίννται* という読み方の他に、*ἀπαμείρεται* と読む本は存在したということであろう。*ἀπαμείρεται* はプラトンの時代にまで遡る古い読み方である。そして、模倣の手法から考えるとアポロニオスは *ἀπαμείρεται* という読みを知っていたということになる。そうだとすると、アポロニオスは *ζωῆς ἀπαμείρεται* という句によって何を示そうとしているのだろうか。一つは、*ἀποαίννται* と *ἀπαμείρεται* という読み方が並存していて、アポロニオスは *ἀπαμείρεται* を読むべきであるとした、という考え方である。

或いは *ἀπαμείρεται* は *ἀποαίννται* よりも珍しい読み方であったとも考えられる。それが *ἀπαμείρεται* を使う動機であったかも知れない。それとも、*ἀπαμείρεται* が本来のホメーロスの読み方であって、写本伝承の過程でより一般的な動詞である *ἀποαίννται* に入れ替ってしまったのであろうか。逆の場合は考えにくい。この場合はどうも *ἀπαμείρεται* のほうが *difficilior* であると言える。もう一つは、アポロニオスの *ξωῆς ἀπαμείρεται* という詩句のポイントは *ἀπαμείρεται* にあるのではなく、*ξωῆς* のほうにあるのではないかという考え方である。プラトンもアテーナイオスもエウスタティウスも *ἀπαμείρεται* については一致している。しかし、ホメーロスの *ἀρετῆς* については *νοοῦ* という異読を残している。ホメーロスの詩句によれば、豚飼エウマイオスは、奴隷の境遇に身を落すなら、*ἀρετή* の半分を失う、と述べている。プラトンとアテーナイオスは *νόος* を読む。*ἀρετή* ならそれぞれの男のもつ職能のことであろうし、*νόος* についてはエウスタティウスが註を付して *φρόνησις* のこととしているように、思慮、目的ということになろう。それでは、アポロニオスの *ξωή* を読むとどうであろうか。これをホメーロスの詩行の中で *ἀρετῆς* の代りに読む場合、エウマイオスの述懐は非常に現実味を帯びて生き生きとしてくる。奴隷の境遇に陥入ると人生（能力を含めての生活のための財も意味の中に入る）の半分は奪われてしまうのだ、ということになろう。*ξωῆς* は *ἀρετῆς* 及び *νοοῦ* 以外の第三の読み方であって、アポロニオスはこれを選んだのかも知れない。或いは *ξωῆς* がアポロニオスの conjecture であったかも知れない。いずれにせよ、*ξωῆς ἀπαμείρεται* はホメーロスの *ἀρετῆς ἀποαίννται* という読み方に対するアポロニオスの批判であったと考えてよい。

## 註

- (1) Arte Allusiva and Alexandrian Epic Poetry, CQ 17, 1967, 85-97; Hellenistic Poetry and Homer, Antiq. Cl. 39, 1970, 46-77; The Utilization of Homeric Variants by Apollonius Rhodius, Quad. Urb. 15, 1973, 73-81; Aspects of Apollonius Rhodius' Language, Arca 2, 1976, 271-291, 等を参照せよ。
- (2) W. Leaf の註解 (THE ILIAD, 1900-1902, London, 2 vols.) は数々の材料を提供してくれる。
- (3) Eustathii Archiepiscopi Thessalonicensis Commentarii ad Homeri Odysseam, Tom. I, 1825 Leipzig.
  - (4) Scholia Graeca in Homeri Iliadem recensuit Hartmut Erbse, 1969-1988 Berlin, 7vols.
  - (5) P. Buttmann, Lexilogus oder Beiträge zur Griechischen Wörterklärung, I, 1824, p. 169ff.
  - (6) M. Leumann, Homerische Wörter, 1950 Basel, p. 44.  
H. Frisk, Griechisches Etymologisches Wörterbuch, 1973 Heidelberg, II, 313.  
P. Chantraine, Grammaire Homérique, 1958 Paris, Tome I, p. 30ff.
  - (7) F. Bechtel, Lexilogus zu Homer, 1914, P. 150f.
  - (8) G. S. Kirk, The Iliad: A Commentary, vol. 1, 1985, Cambridge, p. 115.  
A. Heubeck, A Commentary on Homer's Odyssey, vol. 1, 1988, Oxford, p. 242.
  - (9) Eust. 1387. 3
  - (10) W. Leaf, The Iliad, 2 vols., 1900-1902 London.
  - (11) この法則については次を参照されたい。W. Leaf, The Iliad, vol. II, 1902 London, p. 631ff.,

Appendix IV. : P. Maas, *Greek Metre*, 1962 Oxford, p. 77.

- (12) U. von Wilamowitz-Moellendorff, *Die Heimkehr des Odysseus*, Berlin, 1927, p. 31n. 3.  
P. von der Mühl, *Homeri Odyssea*<sup>3</sup>, Basel, 1961 (Stuttgart, 1984)  
W. B. Stanford, *The Odyssey of Homer*<sup>2</sup>, London, 1959.